

筑前國續風土記 卷之十二 目錄

嘉摩郡

北斗社 大隈町 麟翁寺

岩瀧 岩根寺 鰺大明神社

安國寺舊址 立岩村 五百羅漢

庄内河内 山田河内 猪鼻

桑野 馬見村馬見山 宇土浦山

千手 長野村河底村 上下村

小嶽 西郷村 臼井村永泉寺

鯰田 漆生村 鹿毛馬村

穂波郡

大分八幡宮 内住 八木山

椿村 合屋 目尾

明星寺 大日寺 飯塚村

天道町 舍利倉村 高田村

種因寺並十三塚

山伏塚

内野村

山口村

馬敷村

筑前國續風土記 卷之十二

貝原篤信選定

貝原好古編錄

竹田定直校正

嘉摩郡

日本紀、安閑天皇二年五月、筑紫穗波屯倉、ほなみのみやけ鎌屯倉をかまのみやけをおくとあり。是嘉摩、穗波の事國史に見えたる初也。此郡は穗波郡と相ならんでつゞけり。恰一郡の如し。南は穗波の上流にありて、穗波とならばず。北は穗波と東面にならびて、嘉摩は東にあり。穗波は西にあり。凡穗波の東南に當れり。此郡の東は豊前田川郡につらなれり。三方に大山あり。中に大河あり。薪材木ともしからず。山林の利多し。田畑肥饒なり。村里皆山中に在て、土民の風俗質朴なり。好郡と云べし。凡此郡に四河内あり。千年川は下臼井村にて大隈川に落る。長野、河底、千年、是一河内也。桑

野河内より出る川は、則大隈川にして、是本川也。

其東山田河内の川は、蒲生に出て、大隈川に落る。庄内河内の川は、鹿毛馬、勢田に出る。

和名抄に載る所嘉摩郡郷の名六あり。

草壁 三緒 今も村の名にあり。

大村 綱別 今も村の名にあり。

馬見 今も村の名にあり。 碓井 今も村の名にあり。

今稱する所此郡の村の名

宮吉村 井上村 宮吉村之内

上村 鷺迫村 上村之内 大隈村

大隈町 大隈村に屬す。 牛益村

下中益村 中益村に屬す。 久島村 中益村之内

下益村 成貞村 下益村之内

貞月村 上下村 牛隈村 上下村に屬す。

中江村 上下村之内 熊畑村

白木村 熊畑村之内 中畑村 同上

上山田村 向村 上山田村之内

木城村 同上 猪鼻村 同上 下山田村

中山田村 下山田村之内 平村

才田村 平村に屬す。 中籠村 なかごもり 平村之内

辻村 同上 筒野村 桑原村 筒野村之内

高倉村 入水村 山倉村

赤坂村 綱分村 伏尾村 綱分村之内

川島村 岩崎村 向村 岩崎村之内

下臼井村 佐與村 小久保村 佐與村之内

大門村 鯰田村 なまづ 鯰田村之内 古城村

有安村 仁保村 にほへ 有井村

元吉村 多田村 山野村

口春村 くちのはる 山野村に屬す。 漆生村 うるしを

中家村 漆生村之内 田中村 同上

上三緒村 高山村 上三緒村之内

下三緒村 鶴三緒村 下三緒村之内

立岩村 柏森村 立岩村に屬す。

鳴生村 かまふ 鹿毛馬村 かひのま 鳥尾村 鹿毛馬村に屬す。

口原村

石丸村

口原村之内

勢田村

島村

勢田村之内

桑野村

以下秋月領

小野谷村

桑野村に屬す。

山瀬川村

桑野村之内

馬見村

屏村

椎木村

西郷村

上西郷村

西郷村に屬す。

光代村

上臼井村

平原村

上臼井村に屬す。

平山村

泉河内村

栗野村

泉河内村に屬す。

高畑村

同上

檜畑村

同上

瀬畑村

同上

大力村

東畑村

大力村に屬す。

才田村

九郎原村

才田村に屬す。

東千手村

古は東分村といふ。

芥田村

東千手村に屬す。

千手町

同上。古は千手新町といふ。

長野村

同上

川底村

同上

以上九十四村

内

四十八

本村

○北斗社

下益村にあり。此村は大隈の町の東也。此社に祭る所の神、中殿はあめのみなかぬしのみこと天御中主尊にして、左右に伊弉諾尊伊弉册尊を合せ祭る。是天の北辰ほくしんを帝座とするに擬すといへり。されど北斗と北辰は別なり。九月九日祭禮あり。側かたはらに大なる楠樹あり。周十三尋めぐりひろ、其本の空くう虚なる所方二間餘有。其うつほなる内に、たゞみ八疊を敷べし。篤信かつて諸國を多く經歷せしかども、いまだかほどの大木を見ず。からの文海披沙と云書に、建寧都司有ニ五代時樟木ノクスノキ。其竅中可アナノ設ニ數席ヲ。とあり。是此木にひとしかるべし。誠に稀有なる大木也。この村を領する人、災變あらんとては、必其大枝風なきて折る。いにしへよりかくの如しと云傳へたり。此邊大隈村にも是につげる大楠あり。

○大隈町

此町は東は豊前猪膝いのひざに通じ、南は桑野、小石原こしに通じ、西は秋月に通じ、北は飯塚に通ず。四方の通衢也。就中小石原の道は肥前、肥後、筑後、豊後、及上座

下座の人、上方へ往來する道にて、人馬の通行しげき事他方にことなり。大隈より猪膝に行て、小倉に出て船に乗る。大隈町の近邊下中益村に古城の跡有しを、長政公入國の後、此邊にて後藤又兵衛に領地をあたへ、彼城を改め築て又兵衛に預置かる。又兵衛出奔せし後、毛利但馬に此邊にて二萬石采地を與へ、彼城を預られける。元和元年台命下り、凡天下國主の領内は、一國一城たるべきよし仰出され、彼城をばこぼたれける。但馬は其後大隈町に宅をかまへ居たり。但馬子左近相續て別宅とす。左近退きて後、光之公の臣岸本又左衛門別宅とせり。其後又左衛門退きて、近年久野四郎兵衛別宅となり。寶永三年三月廿五日、光之公此邊遊歴し給ふ時、久野氏別宅に立寄給ふ。此邊田圃すくなしといへども、大隈町は民宅多く、人數多し。此郡にては廣き町なり。祇園社あり。

これ産靈也。六月十五日祭あり。つくりやま作山二本有。大隈川は其水上桑野より出、其下山野、みを三緒の間に出、飯

塚の下片島にて、飯塚川と一に成る。又大隈町の東に近く、かぐめ石とて嶺たうけあり。高くけはし。豊前の方へゆく道也。大隈町より豊前境目迄一里四町。猪膝へは一里三十町あり。大隈村は別にあり。大隈町の西むかひは西郷村也。にしのがう近し。大隈町の下は上下村、貞月村也。其次は牛隈村、うしし其下漆生、うるしを其下は岩崎、がまふ蒲生、山野なり。大隈より下の次第かくの如し。

○麟 翁 寺 禪宗

下益村にあり。大雄山と號す。長政公の家臣毛利但馬、此邊を二萬石領しけるが、卒して後此寺に葬る。但馬の追號を麟翁と云。故に寺の名とす。

○岩 瀧

中益村の山の側かたはら高き所にあり。岩間より小流下る。其水流七間許あり。其水の流れ来る岩は、高十間許、横二十間ほどなる大岩也。一石にして分れず。岩泉飛瀑はくのありさまいとめづらし。恨る所は水流の微少なるのみ。雨後水の増れるとき見るによし。此瀧の

前に觀音堂有。圓通寺といふ。僧坊はなし。

○岩根寺

大隈村にあり。此寺岩の下にある故に其號とす。本尊は觀音也。大隈町麟翁寺の末寺也。此寺南に向ひて高き所にあり。後山の奇岩甚觀賞するに堪たり。人里遠くして俗塵の煩なし。

○鰌大明神

大隈村の產靈也。うよすな霜月十三日祭あり。是鰌魚を神に崇あがむと云。是古へにいはゆる鮑君神の類にや。いぶかし。

○安國寺舊址

下山田村の東南の山下にあり。前路廣く長して境地よし。三方に山有て谷ふところ廣し。誠に大寺の址と見ゆ。白馬山景福安國寺と云。光明院御宇曆應二年、勅に依て東福寺より一國に一所づゝ安國寺を置て、國家の長久を祈らせらる。此所即當國の安國寺也。七堂悉く備り、塔頭たちうも多かりしとかや。其古き跡は

今の観音堂より一町おく、山深き所にあり。其地を小園と云。本尊は千手観音なり。文安四年の春、回祿にかゝりて焼失せり。只本尊のみ残れり。其後寺主再興を志し、十方に助成を求め、漸く観音堂を營作し、文明二年に至て成就す。堂は初の地より一町下に建立せり。則今の地也。其後百七年を経て天正二年にいたり、荒廢極りぬ。こゝに秋月氏大藏種實、住持鼎調と相はかりて、重て佛堂を建立せり。其後又元和八年に村中より観音堂を再興す。今はたゞ此観音堂のみ残りて寺院もなし。古の名残とて、今上皇帝の聖壽の牌、及當寺十四代とある位牌一残れり。最初佛堂の在し所に、座禪石と云大岩あり。此境内に感澤寺、周照寺、養主庵などいへる子院の址のこれり。

○立 岩 村

此村の内に不動の佛體と、土民のいへる大岩あり。石の大きさ二間餘、高さ二間一尺あり。其上に立岩あ

り。故に村の名を立岩と云。むかしより堂はなし。此石の上に山靈の木像あり。又此村の内に大なる榧かやの木あり。圍めぐり一丈五尺あり。其所を榧の森といふ。此樹に藤三本まとへり。其藤二本は圍三尺、一本は圍一尺あり。むかしは花萼の長さ三尺餘ありと云傳へたり。今も猶一尺五寸許あり。此榧藤ともに異なる美觀なり。

○五百羅漢

山野村の境内に高き所に石佛一所に多くあり。堂宇はなし。いつの時誰が作りけるにや、しらず。又いつの時よりか多くうせて、今は三百四五十許あり。是を守る寺もなし。又其おくの側なる所に穴二あり。是を民俗には伊勢高野と云。其穴中に石佛あり。いにしへ此ところは宇佐の神領ありしとて、村中に古城の址あり。是を村民は宮成、到津いたうづ氏の古城といふ。此兩氏は今の宇佐の大宮司の氏也。此兩家より留守を置し所なるべし。五百羅漢も豊前の五百羅漢よらひに倣

て立置けるにや。村中に修善寺と云寺址あり。今は
圃となれり。これ五百羅漢を司どりし寺の名にや。
かやうにそくばくの人工を用ひし事なれど、しるせ
し碑もなく、文書もなければ、いつのとき何人のなせ
しといふ事しれず。

○庄内河内

當郡のいと東にあり。嘉摩穂波郡の本河内より別に、
東の方に山をへだて、一谷の中にあり。南方に小山
あり。此河内は南北に長し。東は豊前田川郡と、小
山を一隔て、さかへり。此河内凡十三村あり。河下
より南に上れば、佐與、元吉、大門おほかど、有井、仁保ほう、
多田、有安、綱分わき、山倉、入水いり、高倉、赤坂、筒野
なり。是北より南へつらなれる村の次第也。十三村
の田畠すべて六千石餘あり。谷水も一流也。山倉、入
水の兩村は、庄内の内にて別に一の小谷なり。赤坂
村の東の山間にあり。其谷水は赤坂の下に出る。庄
内の谷のかしらは、筒野を以て上の限とす。筒野の上

に嶺^{たうげ}あり。とふさと云。是を越て平村に下れば別の河内也。庄内の下流は、佐與村より鹿毛馬村^{かけのま}勢田村^{せい}を過、鞍手郡御徳村^{ごとく}の枝村吉野の上より大川に入る。庄内の東に見ゆる木山、北は多田山、南は綱分山也。綱分山尤高く、林木多し。仁保村より東に越て、豊前へゆく道あり。大道なり。飯塚より豊前田川郡糸田へ二里半餘有。仁保と原田の間、からす尾嶺^{たうげ}あり。是筑前豊前の境也。仁保より豊前境迄二十六町三十四間有。原田より香春へゆく。

○山田河内

平村、下山田、上山田を山田河内と云。中山田村あり。是は下山田村の枝村也。中山田村の山の側に笠松とて、笠に似たるうるはしき大松あり。上山田の谷の奥廿町上に熊が畑と云所あり。山間なり。熊山とて、むかし熊の住し山あり。

○猪^{かり}鼻^{はな}

下山田村の内也。上山田と中山田の間に、大隈より

豊前國猪膝に通る大路あり。其少東の方に猪鼻と云所あり。是猪膝によりての名なるにや。茶店あり。延寶の初年より立り。此所三町許東に、筑前豊前の境あり。塚有。是を兩國の境とす。大隈町より此茶屋へ三十町、此茶屋より豊前猪膝町へ一里あり。

○桑 野

此郡の川上最南にあり。是遠賀川の源也、此村は兩山の間は谷中にあり。本谷村小野谷村とて兩村あり。すべて桑野と云。本谷は正流也。小野谷は枝流也。故に小野谷に對して本谷と云。小野谷は本谷の枝村なり。本谷の上より嶺を越て、上座郡小石原に至る。其嶺を嘉摩嶺と云。小野谷は此谷口の西の傍に在小谷也。小野谷より本谷村へ半里、本谷より小石原へ一里半あり。本谷より大隈町へ一里半あり。本谷に大行事の社あり。小野谷にも是を勸請す。何れも其村の産靈なり。桑野村豊前境山の峯筋に疣岩いばとてあり。大岩小岩共に皆まるき小石つきて、いばの如し。

めづらしき岩なり。

○馬 見 馬見山

小野谷の西北にあり。村の上に馬見山あり。高山也。此山甚廣大にして竹木繁茂せり。山上に馬見大明神の社あり。白馬大明神とも云。何なる神を祭るといふ事をしらず。大山なればおのづから其神靈などかなからざらんや。此神葦毛の馬を甚いみたもふ。故に此里に飼ざるのみにあらず。他所より來るをも村中にといめおかず。かやうの所他所にも猶あり。信濃の望月、攝津國の有馬、湯山なども亦しかり。馬見村より北の方、山下につらなれる村の次第は、屏村、椎木、上西郷、かみにしのがう下西郷、光代、下臼井也。

○宇土浦山

屏村に屬して村の上にあり。馬見山の西北に在てつづけり。又一の山とも云。馬見山をば二の山といへり。何れも高山也。古所山より猶高し。此山を一の山といへるは、其高き事馬見より愈まされるなるべし。

○千手

村中に千手寺あり。これに依て村の名とす。本尊千手觀音也。此寺山間にありて閑寂かんせきなる境地也。其側に石塔有。里民は、天智天皇の御陵みささぎなりと云。天智天皇の御子に嘉摩郡を賜りし事あり。其人天皇の崩じたまふ後に、是を立給ふと云。然れども梵字など猶さだかに見ゆ。さのみ久しき物にはあらず。いかなる人の墓所にや。いぶかし。又千手町とて宿驛あり。長政公入國の後より立し所也。

○長野村 河底村

此兩村は千手村の川上、古所山の東北の下いと高き處にあり。下よりはるかに高く見あぐる非常の村居也。古所山には近く、麓には遠し。かゝる所も久しく住なれて、わびしからざるは、人のならはしなりや。千手の川下は芥田村なり。

○上下村

近年此村の貧民に次郎と云者ありき。幼うして父を

失ひ、母に養はれ、十五歳に成しが、家きはめて貧しければ、母を養ふべきいとなみなくして、みづからこつじき自乞兒となり、日々に朝は飯を炊かしぎて母にそなへ、炊器すゐきなと洗ひ取納めて後、村々をめぐりて物をこひ、暮はやく歸りて、みづから炊ぎ母に供ふ。夕べくの洗足の湯もおこたりなく、みづからわかつて先母にあらはしむ。若日暮遅く歸る時、母食物を調へ、洗足の湯をもわかし置時は、食は跪ひざまづき戴いたきて食ひ、足の湯は謹んでいたゞきて洗ふ。いかやうの事有りても、一日二日の間母に別れ居る事あたはず。母老て病多く食すくなければ、おのれも憂へおそれて、わづらひとなり食せず。時々白銀など拾ひ歸りたりと自ら語る。其性直實にして、ぬすみする人品にあらず。是孝子を天のめぐみたまへるなりと、村人も感じけるとぞ。後に母病に臥ける。次郎も亦病に臥し、母食せざれば、次郎も食すゝまず。母病おもりて死しければ、次郎も亦次第に病おもりて、母におくるゝ事七日、行

年廿一にして、なげき死ける。是寛文の初年の事也。賤民もとより文字をしらず。孝の道を聞に非ず。自其天性に出て、至孝なる事斯の如く。十室の邑にも忠信の人ありとは、かゝる故なりや。今此事を聞て至孝を感じ、打捨がたくして、聊こゝにしるし侍る。牛隈村、むかしは上下村の枝村也。元和八年より別村となれり。

○小^を 嶽^{だけ}

上曰井村、平山村の上にある小高き山也。山上廣くして林木しげし。山のかたちうるはし。

○西^{にし} 郷^{がう} 村

西郷村に八天神あり。其内、一は土地神なり。

○曰井村永泉寺

曹洞宗也。此寺秋月氏先祖數代の位牌あり。元祿五年、日向國財部の城主、秋月佐渡守種信より、其先祖の遠忌に當れりとして使僧來り、此寺に金子を^{なるとさん}ほどこし、法事をなし、焼香して歸る。又秋月邑^{なるとさん}鳴渡山觀音

堂の上なる秋月氏先祖の墓にもまうで焼香し、燈明料として、山守に金子をあたへて歸る。又此所に松岩院と云寺有。永泉寺の末寺也。

○鯰なまづ田

此村は大河の東側がはにありて舟付なり。運漕うんさうの便よし。此邊は長政公の時より家臣野村隼人祐直給はり、代領せり。晴雲寺とて曹洞宗の禪寺あり。萬松山と號す。是祐直を葬りし寺也。祐直が墓は晴雲寺のほとり、岡の上にあり。今も野村氏より寺産を施せり。

○漆生村

宗祇指南抄曰、漆川は嘉摩うるしほと世俗に云在所也と。今案に、御笠郡にも漆川あり。いまだしらず、何れを是とすべきや。太宰府に近ければ、御笠郡にあるを是とすべきか。

○鹿毛馬村かけのま

小堤山、古家山とて、いにしへ馬牧ありし所あり。四方に石垣を築廻はせり。めぐり二十町許あり。此牧よ

り鹿毛の良馬出し事ありて、村の名とせしにや。又此村の内大谷山の嶺たうげ、豊前境に日王殿といふ長七尺許の石佛あり。其側に寺ありし所と見え、礎残れり。池もあり。いかなる寺なりしにや。

穂波郡

此郡の名の初て國史に見えたる事、前にしるせり。嘉摩郡と同じ。此郡は嘉摩と相ならびてつゞけり。嘉摩は東南にあり。兩郡一河内に在て同郡の如し。但南の方は、もつばら嘉摩にて、所によりては嘉摩穂波東西にわかれ、嘉摩は東にあり。西は穂波なり。山深くして薪材ゆたかに、川流れて炎旱のうれへなく、土地肥饒にして種植の利多し。邊鄙にして民俗いやしく、言語つたなしといへども、頗質朴にして厚きに近し。嘉摩穂波皆好郡とすべし。

和名抄に載る所、穂波郡郷の名五あり。

土	三	坂	薦	田	磐	穂	波
は	み	さか	こも	た	しま	ほ	なみ
師	坂		田	村の名に今も	同上		
同上							
堅							

今稱する所、此郡の村の名

土師^{はじ}村 谷村 土師村の内

取平村 同上 八王寺村 同上 小隈村 同上

土屋村 秋松村 明星寺村

南谷村 明星寺村の内 平塚村

出雲村 平塚村の内 飯塚村

向町村 飯塚村の内 長尾村

大木村 長尾村の内 中村

九郎丸村 庄司村 吉水村 庄司村に属す。

尾太郎^{をたら}村 庄司村の内 幸袋^{かうぶくろ}村 河袋と書をよしとす。

野添村 幸袋村の内 津島村

津原村 久保白村 津原村に属す。

若菜^{つはき}村 目尾^{しやかのを}村 薙野^{なすの}村 目尾村の内

椿村 花瀬村 棕^{ひくもと}本村

堀池村 吉隈村 元吉村

太郎丸村 天當町 太郎丸村の内

高松村 同上 小正^{をまさ}村 本原村 小正村の内

新原村	同上	阿惠村	四郎丸村	阿惠村 の内
猪浦村	同上	八木山村	重原村	八木山村 の内
久保尾村	同上	石坂村	平恒村	
入藏村	平恒村 の内		樂市村	
今吉村	樂市村 の内		日隈村	同上
名越村	同上	建花寺村	古野村	建花寺村 の内
相田村	上村	相田村 の内		
豆田村	古は大豆村 といふ。	枝國村		
徳前村	内住村	大野畑村	内住村 の内	
切畑村	同上	中畑村	同上	
蓮臺寺村	池尻村	蓮臺寺村 の内	十郎畑村	同上
川津村	南尾村	舍利倉村		
本谷村	舍利倉村 の内	北古賀村		
忠隈村	馬敷村	下村	馬敷村 の内	
伊岐須村	内野村	見定村	内野村 の内	
小深田村	同上	横山村	同上	
山口村	荒谷村	山口村 の内	大石村	同上

米山 こめの 村	同上	伊川村	乙丸村	伊川村 の内
片島村	壽命 すゑ 村	瀬戸村	瀬戸村	壽命村 の内
横田村	辨 べん 分 ぶん 村	薦 せん 田村	潤 うるふ 野村	
安恒 やすつね 村	高田村			
大日寺村	石松村	大日寺村 の内		
大分 おおぶん 村	松山村	大分村 の内		
柳橋 やないはし 村	中屋村	馬場島村	中屋村 の内	
内山田村	彌山村	古は彌山田村といふ。		
君畑 きみが 村	彌山村 に屬す。			

以上百五村

内 五十八本村
四十七枝村

○大分八幡宮

大分村の中にあり。只本國中にて八幡五所別宮の第一なり。仲哀天皇九年十二月十四日、神功皇后糟屋郡宇美邑うみのさとにて、應神天皇を誕生したまひ、翌年の春都にのぼりたまはんとて、皇子を相具あひぐし、宇美村より大口嶺乳たうげらのみ吞坂を越、御腰掛を過て此地に留り給ふ。

則八幡宮のある所なり。此所を宮の浦といふ。かゝる靈跡なればにや、聖武天

皇神龜三年、御託宣ありて、御社を立らる。祭れる所の神三座、中殿八幡大神、左殿神功皇后、右殿竈門山神なり。はじめの宮所は、今の御社のうしろの山上一町ばかりにあり。今其所を嶽の宮といふ。礎なほのこれり。近世今の所に移し奉る。御社は南にむかへり。箱崎八幡大神もとは此社におはします。延喜二十一年六月二十一日、八幡大神の託宣によりて、是より箱崎にうつし奉る。其事箱崎八幡宮のところ
に詳にしるす。されど此所は、むかし神功皇后應神天皇のといまりたまひしところなれば、御社はそのま
まにて、もとの如く三神を祭り奉る。或書に、この御神體は神功皇后の御腰にはさみたまひし石、怡土郡深江の邑子こ負原ふに在しを、のちに此社の神體とせしといへり。しかれども今かの石此御社にはなし。此社いにしへは大社にて、宮立尤いかめしく、祭田も多かりしに、中比亂世にて衰廢し、樓門末社もなく、

神領も絶てなくなりぬ。され共猶いにしへの跡のこりて、宮所いと廣く、御社のまはりに、しげれる森の木立も古めかしく、御社には小流ありて潔し。いさぎよ石の鳥居は、寛永七年に長政公の家臣、小河久太夫が家禮、安部惣兵衛といふ者建立せり。過にし庚午の冬、村民伊佐甚九郎といふ者、又別に石の鳥居を建立す。額の大分宮の三字は、花山院前内府定誠公の筆なり。是元祿四年篤信が都に在しとき、乞によりて筆をそめたまへり。むかしは八月十五日に放生會を取行ひ、神輿を頓宮かりみに移し奉る。八幡宮より南四町許に、貴船の森あり。

是神輿御幸ありし所也。今は此禮絶たり。又九月九日に流鏑馬神樂など有て、大なる祭を執行せしとかや。今も其日には村民うちつどひ、それとばかりに祭禮を執行へり。此御社の前、大楠多し。其中にいと大なるは、めぐり五圍あり。むかし此所に大なるつき鐘ありしを、豊後の賊兵來りし時、打わり取て歸り、龍頭ばかり残りて今社邊にあり。社僧の坊を妙珍山長樂寺と云、天台宗也。むかしは社僧の家も榮

えて、大寺なりしにや。其時の小寺の名、今も畠の字に残れり。八幡宮より七八町東の方、田の中に輪藏の跡あり。大なる礎石多し。大石を切て柱をすへたる址あり。凡大分村は町ながく、里廣く、やどころふかくしづかにして、其景色物ふりたり。境内の山のたゞすまひ、林の木だちいとおもしろく、西なる山谷のあひだ中野山と云所、又塘のほとりに、おほくおひしげれる松のうるはしきよそはひなど、又なくめでたしと見ゆ。直なる雌松多し。すべて此あたりの山林の風景いとすぐれたる事、遙に他郷に異なり。豊前より博多の方に来る者、往々此村を通り、御宮の前をすぎ、花廻へ行、篠栗に出る者多し。是又大道なり。神前の二王門は、寶永五年村中より立之。二王の木像は郡中より立之。

○内^{ない} 住^{ぢう}

此村は糟屋郡にさかへり。篠栗より八木山^{やぎ}へ行く大道の間より右に轉^{てん}じ、別谷にしたがひて上れば、内

住の枝村花廻と云所あり。花廻の谷の上に、どうめき
とて瀧あり。其外にも又小瀧二あり。其上に十郎畑
といふ所あり。せばき谷中にあり。民家八九軒あり。
是亦内住に屬せり。左谷村より十郎迄一里餘あり。
十郎畑の上の高山を日の平ひらと云。十郎畑より糟屋郡
左谷へ越る乳呑坂は、上りになり、十郎の方にあり。
嶺に大口といふ所あり。乳呑坂と云は、神功皇后宇
美邑より都へ上らせ給ふ時、應神天皇此所にて乳を
のみたまひし所と云。其東に大野といふ所あり。是
又内住村に屬せり。民家八區あり。此所甚高し。冬
雪ふかく寒甚し。夏蚊なし。十郎畑へ八町ばかりあ
り。大野より大分村へ一里餘、下り坂也。山中谷間を
通る。大野の高き事、大分まで一里餘の下り坂あるを
もつて知べし。大野より高田へ下るも一里餘、皆坂な
り。大野より其本村内住へ一里あり。久保山は大野
と高田の間小村なり。上に大なる茂山あり。大野山
と云。神功皇后此野を過たまひし時、山中にはめづ

らしき大なる野なりとのたまひし故、大野と名づく。
又花廻より左へ行て、穂波郡舍利倉村くらに越る道を、む
じな越と云。又内住村の内、懸尾の古城の東の下に、
御腰掛と云四角なる石あり。方三尺五六寸あり。是
は神功皇后の御腰を掛けて、休ませたまひし所と云。
内住より大分村へゆく間に、石坂と云坂あり。八木山の石坂
とは同名異所也。この谷の左右にた
てる松、よそに替りてうるはし。凡此村境内甚廣く、山の
けはひ松のけしき、尤見所多し。中野山と云所、松林
しげくうるはし。

○八木山

此里は四方皆山ありて、山間の幽谷にあり。鞍手郡
大賀畑の谷の上の極まれる所にありて、西は篠栗の
方より、山伏谷の高き坂をのぼりて此谷に入。東は
穂波の方より、石坂をのぼりて此村に入る。東西と北
には通路あり。只南方は山高くして通路なし。西南
には舍利倉と内住村にゆく道あり。此地は山の上谷
の内なる里也。故に境地甚高くして、人里遠し、冬

は雪ふかく寒はげし。夏は蚊すくなし。雷のおと耳にちかく、といろきなる事恐るべし。寒はげしき故、橘柑みかんぐねんはの類植ても、みのらず。後は枯る。只梅柿栗椎のみあり。萬こと里に替れり。大賀畑の下谷口より、こゝまで凡四里、幽谷をのぼりて來る。大賀畑川の源なり。上座郡の小石原こしに似たる所也。此里に篠栗より飯塚河袋かうぶくろへ通る大道あり。上村下村兩所にわかれて、人寰所くわん々にあり。又此村に龍王嶽と云高山あり。むかしは山上に龍王の社ありしにや、今はなし。此山の南北の諸村の農人等、大旱ひでりの時、此山にのぼりて雩あまこひす。土民、此山は彦山に三尺ひきしと云傳ふ。さほどのすぐれたる高山にはあらず。此山に登れば、嘉摩穂波兩郡目の下に見ゆる。其東に天狗岩とて、高き山の北の側に大岩つゞけり。又此村の境内八十山と大賀畑の間に、馬落の瀧と云所あり。長四十間許大石あつまり、衆石の間を水流る。つゞきたる瀧にはあらず。是より上には鱗上らず。故に鱗返りと云。

瀧の上河中に長岩七間なるあり。大賀畑より上れば、八木山の方地形高し。八木山の内中村と云所に、八木山氏の墓とてあり。老松の社の前に、八木山氏が宅の跡とてあり。これむかし此村を領せし人なるべし。上村の竹林の内、梅の木谷の西の高き所に大松あり。其木の周三圍半にあまれり。疣贅^{いはこぶ}多し。枝さかえしげれり。かゝる大きなる恠松はめづらし。

此松元祿の末年枯たり。石坂は八木山村の東に在。同郡の諸村は皆此坂より下にあり。此坂の上より東の方をのぞめば、豊前の田河郡、嘉摩、穂波の東方の諸村、眼下にありて佳景也。此所の路、初は北方の山上さがしき所にありて、人馬のわづらひ多かりしを、長政公入國の後、如水公是をうれへ給ひ、久しく爰に逗留して、今の石坂の道を切開き給ふ。誠に其惠廣しと云つべし。如水公逗留の時、茶亭をかまへて休息したまひし跡に、今猶松二本残れり。茶屋のあるじの村民には、永代土貢^{とく}をゆるさる。今にしかり。其民屋の

ある所、今も茶屋と云。

○椿^{つばき}村

八幡の宮あり。郷中十村の總社也。社は村中の小高き所にありて、南にむかへり。九月十五日に祭あり。此社前に其枝異なる海石榴樹^{つばき}あり。故に村の名とす。此村其いにしへ宇佐宮の神領たり。故に宇佐八幡宮を勧請せしなるべし。村の入口に木像四體あり。村民は安藝大夫安藝之助夫婦の像なりと云。是いにしへ八幡宮の社職なりし人なるが。其前に八幡宮の御手洗池在。

○合^{あふ}屋^や

此郡の内、庄内、中村、津島、柳橋^{やない}の四村、一谷同流の内也。此村すべて合屋といふ。高取の甕器^{やきもの}、鞍手郡の内が磯^そにて焼て後、寛永七年の比より、中村の内、白旗山の北の麓にうつり、三十二三年此地にてやく。白旗山及庄内の寶光山の木をきれり。白旗山に檜樹^{ひのき}多し。白旗山西は合田村に屬し、東は中村に屬せり。寶光山は又別山にて、庄司村に屬せり。

中村の内、鼓打權現、笛吹權現の社あり。山高き所にあり。是合屋あふやの四村及河袋かう村の惣社也。庄司村の鰐淵の神社は、合屋五箇村惣社の下宮也。佐伯氏さいき世其祭を司どる。河袋は合屋の谷中にあらざれ共、其地相つゞけり。古老云傳ふるは、神功皇后三韓を討たまふ時、志賀の濱にして神樂を奏せられし時、笛鼓を司どりし神也といへり。庄司村に寶光山あり。木山にて美材多し。凡八萬坪ありと云。この所に寶光寺養正菴など云いにしへの寺跡あり。

○目しやかの尾

目の字、いにしへ國々に守介掾目かみすけぞうさくわんの官人あり。目は專文筆の事を司どる官なり。しやかとは、さくわんを略せり。此村を目尾と名付し事はしれず。目の官なりし人、此所に居住せしにや。

○明星寺

明星寺村にあり。平壽山妙覺院と號す。天台宗也。開基の時代分明ならず。比叡山の末寺にして、虚空こくう

藏ざうを本尊とす。此寺中比類たいは破して、修理する人なかりしに、聖光上人辨長と號す。筑前人なり。仁元年に寂す。行年六十四是をなげき

再興をこゝろざし、大日寺山に入て樹を切とり、終

に三層そうの塔を立ける。されば昔は大寺にて、堂舎數多く、いとかめしき伽藍なりしとかや。いまはた

だ虚空藏堂むかしは方九間の瓦堂也。今は横二間、縦三間の堂あり。當村の田の字に虚空藏田など云て、むかしの祭田の名残り地藏堂むかしは方四間の堂なり。今は方一間半の堂あり。藥師堂今横二間縦三間の堂あり。

り。藥師田とて祭田の名残り。此外阿彌陀堂方四間の堂なりしと云て、九體の阿彌陀を安置せりと云。あみだ田とて、今も田の字に祭田の名残り。觀音堂方四間の堂なりしと云傳へたり。今に田の字に觀音田とて祭田の名残り。鐘樓方二間の樓也しと云傳ふ。田など皆園と

成て、たゞ其名のみ残りぬ。湯屋池と云小池の形ある所あり。今竹林しげりて、池の形もさだかならず。

中に小島ありて石佛を安置しぬ。此池に明星の光あやしく映えいせし故に、寺號とせしといひ傳たり。又む

かしは此寺に十二坊ありしが、今は圃と成り、或民宅と成て其名のみ残り。十二坊は本坊、是則座主坊なり。妙覺坊、籠藏坊、俊光坊、定壽坊、

楠田坊、花坊、横谷坊、峰坊、此十二坊各當村の田地を以、谷坊、土坊、春海坊是也。

其産とせしと云。今此所を見るに、所々に古跡のこりて、むかしの繁榮を思ひやられ侍る。虚空藏堂の前には櫻の木數株あり。凡此寺は山上なれば、堂前の眺望目をよろこばしむ。堂を下るに石階百八段あり。鐘のこゑを表せりといふ。此寺ありし故、今も村の名を明星寺と云。此村の境内日數が原と云所に松樹あり。是は聖光上人、豊前彦山に參詣せし度ごとに植し松なる故に、日數原といへり。

○大日寺村

村中に金剛禪寺の舊址あり。むかしは大寺なりしといへり。今も其名残りて、幽なる觀音堂有。又村の名を大日寺といへるは、むかし大日寺と云寺ありける故なるべし。今はなし。凡此郡に寺號を村の名とする所五箇所あり。明星寺、建花寺、蓮臺寺、大日寺、舍利藏寺也。明星寺のみ纔に残りて、其餘の四箇寺は其舊跡さへさだかならず。物ごとにふるきはすたり、新きはさかえ、古今變遷して常ならぬはう

き世のならひなり。

○飯塚村

上方より西南諸州往來の宿驛なり。國中の郷里にて民家多き事、姪濱甘木につげり。蘆屋川の上なる故、川舟多く、運漕の便よくして、海味もともしからず。富人も又頗有て、にぎはへる町也。此川は大隈川にはあらず。其源は内野、山口、大分の谷々より出。秋松より飯塚を過、其下なる片島にて大隈川と一になり。驛の北に納祖八幡の宮あり。此所の産神也。此所を飯塚と名付しは、當昔明星寺造營事終り、開堂供養の時、飯を多く炊かしぎしが、其餼餘あまり多くして、此所に塚の如くつみける故、飯塚といふといへり。今其塚残りて、國君行館の内居齋わまの前にあり。此外にも此邑の内にて、先年飯の石と成たるを掘出せし事有しかや。又此村に大養院と云寺あり。寺僧の云傳ふるは、明星寺營作の時、食物をととのへし所に立し寺なる故に、大養院と號す。山號を飯塚山と云。此寺初

は飯の塚の側にあり。國君の行館を作られし時、今の地に移せり。此寺は如水公長政公朝鮮の軍に往來したまふ時、度々立より給ひしが、長政公筑前を給はり、豊前中津より此國に入給ふ時も、亦此寺に寓居したまへり。依て寺産十石を賜ふ。今にしかり。

慶長の比の住持功傳・山野田圃の事を知り、數量の事など才覺ある僧なる故、長政公國中田圃の廣狹を改め計りたまひし時、嘉摩穗波等檢地の役人に功傳を加へらる。秋月領などに功傳竿と云あり。如此なる故、名島福岡へも召れけり。彼是の恩惠を仰て、後年長政公の影像をも安置す。寺の門内に建石あり。三世僧斗南、一石一字の法華經をうづむしるしなり。此寺の本尊觀音は行基の作と云。

○天道町

太郎丸村の内也。天道宮あり。此社を建し初は、寛永七八年の比にや。太郎丸村に松永孫四郎入道正齋と云者あり。神託を得て、能く吉凶をいふ。下民信仰

して社を立。これ天よりの告と思ひしにや。其社を天道宮と號す。參詣する者多し。終に民屋多く出來巷ちまたをなして天道町と云。あだかも宛宿驛のごとし。此所より飯塚へ一里、内野へ二里七町あり。長崎街道也。かいだう天道社建て後、十四五年の間參詣する者甚多し。其後漸衰へたり。今猶其社ありて村民是を祭る。又此郡河津村に阿彌陀堂あり。寛永十四年の比より、此佛靈驗ありとて參詣する者、日々群集して賽錢さいせんを多くなげうつ。其間十四五年有しが、後は漸衰へぬ。

○舍利倉村

八木山の南、龍王嶽の下にあり。むかし此所に舍利藏寺あり。近代寺はなし。村の名とす。村中に寺跡あり。此里に會下あひげの一本松とて、うるはしき大松有。めぐり三圍半ほどあり。高し。此村に西の方より來るには、糟屋郡篠栗町と八木山の間の南の谷に入て上り、むじな越と云坂をこして、此村に至る。

○高田村

此村の田の中に四十塚とてあり。いかなる塚なるにや、詳ならず。むかしは其數四十ありしといへども、逐年くづしたるにや。今は只二十餘残れり。又一日塚とて、めぐり二町餘、高三十間餘の大塚あり。むかし富人ありて、一日に築かせし塚といふ。其築かせし由をしらず。

○種因寺 井十三塚

土師村はじにあり。本尊藥師佛也。是七佛藥師の一にして、傳敎大師の作也。然れども其佛昔年炎上して、今はなし。焦灰を箱にして本尊と傳へたり。むかしは寺領田地多くつきて、寺も榮え侍りけるが、今は藥師堂のみありて、寺はなし。又此村の高き岡に十三塚あり。

○山伏塚

庄司村にあり。長六間、横一間許あり。むかし彦山の山伏、宗像大宮司へ祈願の爲に往たりしが、其歸るさに、鞍手穗波兩郡の境三の谷と云所にて、山賊に

あひ、山伏三十人残らず殺害せらる。其死體を埋たる塚也。

○内野村

山谷の中にある村にして、飯塚より山家に通る驛家也。民屋多し。是より西、山をこえて、御笠郡山家やまゑの宿へ行く。其間の坂を冷水越ひやろつこえと云。内野町むかしはなし。慶長十七年、長政公其家臣毛利但馬をして、此地を見そなはしめ、初て町を立させらる。是より飯塚へ三里七町、御笠郡山家へ二里廿一町、御笠郡へ越す所の冷水嶺迄一里十町あり。根地嶽ねちだけと云高山あり、竈門山につぎて高し。根地とは内野の社人のいへる號なり。竈門山山伏の古傳には、根手嶽根手權ねてだけ現と云。大根手權現とて、山上より少下に瓶かめ一あり。是を神體とす。むかしは社あり。今はなし。瓶のわたり一尺四五寸有。内野の谷の上に三箇山かみとて、山中に三の村あり。夜須郡に屬す。内野と同谷也。内野より御笠郡山家に越る嶺たうげより、東の方下二町ばかり

山間に、冷水出る所あり。其側かたはらに石佛あり。是内野村の境内なり。此冷水有によりて、其嶺たうげを冷水越と云。

○山口村

此村内野村より北の方、別の谷中のひきゝ所にあり。谷中せばく兩山せまるゆるるに泉聲常に聒かまびすし。猪鹿多し。是より米こめの山嶺たうげにゆく。入口なる故に山口と云。むかしの京へ上る大路也。此村より飯塚へ三里、宰府にも三里あり。京、堺の商人長崎へゆくに、宰府を見ほりまく欲する者は、必この道を過ぐ。此村の北に茜あかね谷と云所あり。むかしは此所にて茜を染る。馬敷山のふもとなり。米こめの山嶺たうげは山口村に屬す。嶺より此村迄一里に近し。是太宰府より山口へこえて、飯塚の方に出る道にして、いにしへ太宰府及近國より都への大道也。

○馬敷村

山口村の北にあり。上に馬敷山とて大なる茂山あり。村中の池に中島あり。民俗の傳ふるは、むかし天馬

の死せしをここに埋めしといふ。石塔あり。此村山
口の隣谷なり。其間十町あり。

筑前國續風土記卷之十二終
